

幸福の所在

藤澤武義

一九八一年八月三〇日
仙台「キリスト者の集会」講演

マタイによる福音書第五章一節から一〇節まで

- 一 イエスはこの群衆を見て、山に登り、座につかれると、弟子達がみもとに近寄ってきた。
- 二 そこで、イエスは口を開き、彼らに教えて言われた。
- 三 こころの實しい人たちは、さいわいである。天国は彼らのものである。
- 四 悲しんでいる人たちは、さいわいである。彼らは慰められるであろう。
- 五 柔和な人たちは、さいわいである。彼らは地を受けつぐであろう。
- 六 義に飢えかわいている人たちは、さいわいである。彼らは飽き足りるようになるであろう。
- 七 あわれみ深い人たちは、さいわいである。彼らはあわれみを受けるであろう。
- 八 心の清い人たちは、さいわいである。彼らは神を見るであろう。
- 九 平和をつくり出す人たちは、さいわいである。彼らは神の子と呼ばれるであろう。

一〇 義のために迫害されてきた人たちは、さいわいである。
天国は彼らのものである。

一年ぶりにご当地に來させていただき非常にうれしく思います。われわれ日本人は幸いということはどういうことであるかを考えるとき、普通には、病気をしない、仕事が順調にいき、失敗ということ無く、食べ物でも着物でもいろんなものが豊かにあつて、そして毎日楽しく暮らせるというようなことが幸いであり、そして大部分の人たちはこういう意味の幸いを求めて生きておるように考えますが、如何でしょうか。イエス・キリストは今申しましたようなことを幸いであると、そういう境遇にある人を幸いであると言っておられるとお思ひになりますでしょうか。今お読みくださったようにキリストは幸いということ、「山上の垂訓」において八回言っておられます。このキリストの言われた幸いはそういうこととは関係のない、全く違ったことにあります。聖書を読みますと、山上の垂訓以外にも幸いということを行っているところが沢山ございまして、詩篇の第一篇にあるようなことも現代の日本人が考えることとは違った幸いがあります。その外、あげれば十以上ありますが、いずれもさきほど申し上げた幸いとは違ったものであります。



山上の垂訓はキリストの深い教えでありまして、その深さははかり知れないほどののです。しかし、多くの方たちは誤

解なきるのです。聖書を十分読んだことがなく、イエス・キリストを信仰したことのない方たちは山上の垂訓が幸いであるわけではない、キリストは気が狂っているのではないかと、言うふうな感想を申されるのです。もし、何かの事情で少しく詳しく話させていただく機会が与えられますならば、旧約聖書の一番はじめのページから新約聖書の一番うしろの黙示録まで聖書を総動員して、キリストの、特に山上の垂訓の言葉を説明したいのですが、それをしますと三節だけで二、三時間かかっても十分に説明できないと思います。今までそういう説明を試みたことはありませんが、私は伝道の使命を頂いておりまして、イエス・キリストの御再臨が十年、二十年先までも無く、私が天国にまだ召されなくて今後二十年、三十年も生きれば、そういうことを試みたい気がしています。それほどまでにキリストの言葉、特に山上の垂訓の言葉は深いのです。

ここに出ている幸いの内容は、普通の人間の考えとまるつきり反対です。反対であるので、この記述の教えに反発を感じる人があるのもやむを得ません。しかし、イエス様は間違ったこと、真理に反したことを言っておいでになりません。今朝も日課としてヨハネ福音書の第十七章を拝読いたしました。その中に「あなたの御言葉は真理です」（一七節）とあります。普通の人間の考えと全然違った、しかもまるつきり反対と思われるような言葉が真理なのであります。こういう深い真理が「本当にそうだ、アーメン」と言える人が幸いなのであります。表面上の貧しさや悲しみにあつていることなどは実際は問題ない。勿論、キリスト信仰に進んでいかないとそういうことは分かりません。

マタイ福音書には「心の貧しい人たちはさいわいである」とあります。ルカの方にはその「心」は付いておりません。単に「貧しい人たちはさいわいである」とあります。マタイはマタイ独特の編集をした訳ですが、ルカの方が原形だといわれております。



マタイ福音書第五章三節に「天国は彼らのものである」という言葉があります。そして第四章二三節〜二五節にこの言葉の動機と言えるものが書いてあります。

「イエスはガリラヤの全地を巡り歩いて、諸会堂で教え、御国の福音を宣べ伝え、民の中のあらゆる病気、あらゆるわずらいをおいやしになった。そこで、その評判はシリヤ全地にひろまり、人々があらゆる病にかかっている者、すなわち、いろいろの病気と苦しみに悩んでいる者、悪霊につかれている者、てんかん、中風の者などをイエスのところに連れてきたので、これらの人々をおいやしになった。こうして、ガリラヤ、デカポリス、エルサレム、ユダヤ及びヨルダンの向こうから、おびただしい群衆がきてイエスに従った。」

当時ユダヤ人は国が減んで以来、五百年もたつており、亡国のために苦しんでおりました。ローマ帝国の領土で、総督が来て治め、ローマの軍隊がいて、ユダヤ人はその兵隊達にいじめられました。そして多額の税金をローマに納めねばな

らないため、非常に貧乏でありました。今日私達日本において税金を納めるといろいろなことに使います。例えば警察は電話をすればすぐやって来る、消防署があつて火事ときは消してくれ、あるいは小学校と中学校は義務教育であつて授業料を払わなくても学校に行くことができます。しかし、当時のユダヤ人はそうでなくて出した税金は全部そっくりローマに持つていかれたのであります。このような状況で貧乏であり、そのことを非常に悲しんでおつたのであります。

また、ユダヤ人は神様から選ばれた選民としての自覚があり、誇りをもつておりました。選民たるものが国が滅んで、亡国の民としてローマの軍隊にいじめられ、貧乏であつた。旧約聖書の預言から見ても、そんなことがあるべきでないという考えから、悩み悲しみがあつたのです。そういう動機でイエス様のところには大勢の群集が来しました。貧乏だから医者にかかれぬ病人も多いし、二三節以下にあるとおりのいろいろな病気が来たのであります。てんかんとか、悪霊につかれたとか、ここに上げていないような病気の人も来たにちがいない。ことに気の毒なのはハンセン病者でありまして、レビ記第一三章に汚れたものはどうしなればならないかについて、非常に厳しい規則がでております。ハンセン病者はその律法の上でも差別され、嫌われまして、口で「汚れたもの、汚れたもの」と言つて、遠方から声をかけねばならなかつたのです。またエルサレムの神殿が出来る前は、幕屋があつて、ハンセン病者はその宿営から相当離れたところに寝起きしなければならぬ、その律法にそむけば追放され、民衆から外されてしまうというような罰を受けねばならなかつたのです。実にハンセン病者が一番気の毒でかわいそつたのであります。

イエス様はそういうハンセン病者であつても、どういう病者であつても非常に同情されまして、そば近く快く受け入れて、慰め励まして、どんな病気でも癒されました。そういう時代的背景をもとにしてこの山上の垂訓を味わうべきなのであります。



さきほど言いましたように大勢の群集がやつてきました。そして一節には「山に登り」とありますけれども、実際は高い山ではなかつたと思ひます。高い山といへばパレスチナの北の方のヘルモン山などありますが、そうではなくベツサイダ辺の平らな所であつたと思ひます。ルカ福音書第六章一七節には「イエスは彼らと一緒に山を下つて平地に立たれた」とあります。そして大勢の群れとユダヤ人達、ツロ、シドンから来た群集もいたのですが、イエス様は群集よりも弟子に聞かせたい、このことはルカ福音書六章二〇節に「イエスは目をあげ、弟子達を見て言われた」とあり、弟子を中心にして話されたことがわかります。しかし群集もぜひ聞かせて下さいと言つて来たのを追い返されたのでなく、遠巻きに座り、聞かせていただいたのであります。そしてたぶん時期は春頃であります。マタイ福音書第六章に「ソロモンでさえ、この花の一つほどにも着飾つてはいなかつた」とありますように、実際にイエス様のそばにユリとかアネモネとかの花が咲いていたと思ひます。ある注解書には絵が載つており、高い山ではなく平らかなところで、「平和の説教」という題で画いてありました。そしてルカ福音書には「イエスは目をあ

げ、……」、うつむきではなく目をあげ、あるいは天を見るようにしてお話しになった、そのような様子が書いてあります。

マタイに帰りまして、二節に「口を開き……」とあります。口を開くとは話すとき当然のことではありますが、ここではそのような平凡なことを言っているではありません。イエスは心を込めて、非常な大問題、尊い真理を語られた。その光景を弟子が見て、こういう言い方をしたのであります。そしてこれは私の想像ですが、すばらしい神の福音のおとずれ、天国の真理を語るのに、弟子が十二人、それ以外の弟子も居たかもしれないが、イエス様は少し高い所に行かれて、「大事な話をするから君達来なさい」と予告してその丘に行かれたのであります。そして群集も来ました。そのとき、イエス様は、弟子達が坐った、群集も遠巻きに坐った中に、すぐに話し始められた訳ではないのです。しばらく沈黙して、どういふ話があるだろうかと弟子達はかたがずをのんで沈黙しておったのであります。耳をそばだてて。そのときはたぶんイエス様は下を向いておいでになったのでしよう。そうして目をあげられた。その間に少なくとも一〇分、二〇分、三〇分はたっていると考えられるのであります。イエス様は下向きかげんで、何といひましようか、瞑想にふける、あるいは黙禱で祈っておいでになったと考えられます。

そうして「よし」と靈感で、天の父の「語れ」の御声が聞こえ、そうしてそこで目をあげられた。そして開口一番、口を開いて話を始められた。そうしたことが考えられるのであります。開口一番に出た言葉が「マカリオイ」、この第一番に非常に力がこもっている。ご存じのように文章はセンテン

スの始めの言葉にアクセントがあり、力がこもっている。またセンテンスの最後の言葉にもアクセントがあり、話そうとするこの気持ち最後の言葉にこめられている。ギリシヤ語独特の言葉のニュアンスが分ると、よけいにこの山上の垂訓、八福訓の深い味わいが分ってくるのであります。

イエス様はそういうわけで矢継ぎ早に、私たちが聖書を急いで読むように、どんどんとこの八福訓を話されたのでなく、最初に三節のお話があった後、一種の休憩があり、弟子達ははじめ、群集に考えさせられた。それから一〇分ないし二〇分おいて第二の「マカリオイ」、そのようにして第三、第四、第五、第六、……第八というように「マカリオイ」と言われた。このはじめの「マカリオイ」を生かさねばならないのであります。塚本訳には「ああ、幸いだ」となっており、あるいは古い文語訳では「幸いなるかな」となっており、感動詞的にイエス様はおっしゃったのであります。口語訳のように「……は幸いである」ではイエス様のおっしゃった気持ちがぜんぜん現れていないのであります。このような普通の平叙文で表すべきではないと思うのであります。

はじめに「幸いなるかな貧しきもの」と言われ、「何故ならば」がきます。「何故ならば天国はかれらのものであるからである」という文章なのであります。幸いであるという理由を第二の文章でイエス様はおっしゃっておられるのであります。

原文で「マカリオイホイブトコイトウプニネウマテイホテイアウトーンエステインヘイバッシレイアトーンウンノン」、ホテイは英語で言えばoとti、ドイツ語のバッハのハッにあたる発音で、英語のbe causeの意味です。ル

カの方もそのようなのであります。そのような文章構造を承知の上でここを学ぶべきであります。

そしてさつき申しましたように、マタイの方は「ブネウーマ」、心霊という意味ですが、心霊において貧しい、貧しいは「プトーコス」、これは第一の意味は乞食ということです。乞食をしなければならぬような貧乏はいっその悲しみであります。そういう貧乏をイエス様は幸いと言われる。まったく違うのではないかと多くの人は考えるでしょう。しかし、幸いであるという理由は「天国は彼らのものである」、金持ちが天国に入れない、貧乏、殊に心霊において乞食のような貧乏なものこそ天国に入る。これは非常に味わうべきことです。はじめに申しましたように聖書のほかのところからも引用して味わうといくらでもあります。



例えばルカ福音書の十六章の十九節以下に金持とラザロの譬話があります。ラザロは非常に貧乏で乞食をしておった。金持の門前において毎日やって来て、しかもハンセン病のような病気があつて、かわらのかけらのようなもので体中を掻いておった。そうして犬が来てねぶつていた。その来た犬をうるさいと言つて追つ払うこともできなかった。たぶん門のところにごみ箱があり、その中に捨ててあつた食べ屑を拾つて、その乞食は生きていたと考えられるのであります。それほど体が弱つておつたのです。しかし、私はラザロは信仰があつたと見ています。信仰のないものが天国に入ることにはでき

ませんから、キリストはラザロを信者として譬話の中で話しておられると私は解釈しております。

それで死にましたときに、ラザロはアブラハムの懐に入り、ひろい意味で天国に入ることができた。金持は信者でなく、食べ物もあり余る。しかも自分の門前でハンセン病者か乞食が居ても愛の実行をしなかつたと考えられます。愛の実行は本当は信仰から出る。ガラテヤ書五章六節にクリスチャンは信仰によつて自然に当然に愛の実行をする、愛の実行を伴わないならば割礼を受けても何にもならない、割礼は無益になると書いてあります。そういう訳でその大金持は信者でなかつた。それで死にましても天国に入れない。黄泉(よみ)におちて舌が焼けただれるような苦しみにあつた。地獄にいけますというとき、火がもえている、地獄では火と言つても物質の火ではない、火であつても光はない、光がないから近づいていつて焼かれねば分らない、と言われていたのであります。そこで苦しいからラザロを使わして舌を冷やさせて下さいとアブラハムにたのんだ。どうでしょうか、この二人の対照的な人物は。譬話ではありますけれども、譬話といつてもためをイエス様は言っておられるのではない。神の国の真理を言っておられるのです。大真理なのであります。金持は地上においては、奢り高ぶつて暮らしていた。お金はマモンの強さがあります。日本の政治屋どもはお金が無くてはなんにもできません。そして経済繁栄、所得倍増とばかり言つてきた。歴代内閣みなそうでした。そのような地位にあるものが言うから国全体がそのようになってしまった。金がなければ何もできない、貧乏が一番不幸だという思想を日本人の全部とは言いませんが、大部分が持つています。そしてそのような思想はみな

利己主義になる。近所にどんな気の毒な人が居ても見て見ない振りをする。韓国人は日本人と比べて今は貧乏であります。教会の牧師、信者といえどもかわいそうな原爆被爆者やハンセン病者に伝道していない、全然していない訳ではあります。韓国にはハンセン病者がまだ七万人くらい、あるいは五、六万人いると言われ、しかも嫌われるから隠れて暮らしています。残念なことではありません。信仰によほど深く進んで、自分のことは第二として愛の実行をしなければなりません。しかし、しないのでありません。私たちクリスチャンはそれではいけないのではないのでしょうか。

先程申しましたように心霊の乞食であることは、すなわちいかに自分が神の前に罪が深いか知ることではありません。真の貧しい者は心霊の貧乏でありまして、自分の罪を知っております。罪の故に人間は死なねばならない、人間は必ず死ななければならぬことを考えると誠につらい苦しいことであります。どんな地位、権利があるものでも死なねばならない。死んでも罪を許されていないものは地獄に落ちて非常な苦しみをしなければならぬ、それは罪の結果であります。自分が貧乏になったのは、何か悪いことをしたからか、この程度においても自分の罪を知ることには幸せであります。罪を知らねばイエス様の十字架は分りません。本当の貧乏を味わいますという、米粒一つが非常にもつたない、ありがたいですね。今頃は生活保護を受けている人でもお米をといでご飯を炊くの、さあーと洗い流して相当にお米が流れることを平気でやっておられる。それからご飯を炊いてお釜の内側のふちについたご飯をお釜を洗って捨てておられる。米粒一つ人

間はまったく同じものを作ることはできない。例えば玄米は一年以内なら田んぼに播けばまた米ができます。形の似たものもできてしまう命のある玄米はほかの物質からつくることできない、どんなに科学が発達してもこれは絶対にできない。だから米粒一つ、麦粒一つ粗末にははいけません。如何でしょうか。私は貧乏したからそういう厳しいことを言いました。岩村さん夫妻は、ネパールはじめ東南アジアの低開発国の貧乏な人々を考えて一週間に一回金曜日には食べない。気の毒な貧しい人々への思いやり、すなわち愛の心、この心を特に経済繁栄の日本人は持つ必要があるのではないのでしょうか。



私は、一九三三年から長島愛生園のハンセン病療養所に、国立のハンセン病療養所は長島愛生園が最初にできましたが、伝道に行くように導かれました。始めはちよつと恐いような気がしましたが、イエス様のことを思うと決して恐がつてはいけなさと、最初から案内してくれた方のなざる真似をして、握手したり、頭をなでたりしました。ハンセン病は本当は医学的に言つて恐ろしくなく、伝染能力の非常に弱いものです。分つてみると少しも伝染の恐さはありません。後にはハンセン病の人と食べ物に分けたことも何回もありました。ある時は結核の併発によるものでありましたが、うみがでていて寝たきりの病人からリンゴをむいてくれるように頼まれ、一つ皮をむいてあげました。一つは多すぎるから半分食べてくれと、一回その人に渡したリンゴを、その人は失明し

ておりましたので誤魔化すことはできませんでしたが、神様に対して偽ることはできません。それで、「ああそうですか」と言って、本人のすぐ寝床の側でいただきました。何でもない、少しも恐ろしくない。イエス・キリストの愛を受けたときに本当にそういう気の毒な人に、少しでも愛の実行をしななければならぬ。私自身が結核をやったものであつて、肺病、結核性の肋膜炎も軽いながらやつております。肺の右の方は半分以上が駄目になり、左は右の二倍以上に大きくなつていきます。だから結核患者に近づくのはよくない。しかし、イエス様に癒して戴いたという確信をもつておりますので、結核患者に対しても堂々とできます。

私の最初の伝道は結核患者それから次第にハンセン病患者に対する伝道でありました。私が訪問したある結核患者に何かの関係で牧師さんが訪問された。けれども恐くて近づきません。簡単な信仰の話をして帰られる。しかし結核は決して恐ろしくないので。口頭に結核のばい菌のつく口頭結核は後には声も出なくなる。食べ物喉を通らない。後には水も通らない。私の住んでいる米子市にもそのような人がいて訪問しました。立町三丁目の二階に休んで居られたので行ってみましたら、バナナがほしいと言われ、一本むいてくれと言われる。むいてあげたら、一本は多過ぎるから半分食べなくてと言われる。ほんとうは少し嫌な感じでしたが、「そうですか」と言っていたきました。

それから一ヶ月に一回溝口と言う田舎の町に伝道に行きますが、集会に来る人は極く少人数、多くて十人くらい、今は人数が減つて四、五人程度。ずっと以前二十年も前のことですが、看護婦さんがその集会に来ておられまして、溝口の町

の橋を渡つてすぐのところにあります。気の毒な病人が火災にあつて焼け出され、その看護婦さんが祈つてやつて下さいと言われました。午前の集会だったので、午後こそへ行きました。上がつて見ると口頭結核の患者さんで、案内して下さつた看護婦さんの中には入りましたが腰かけたままで上がりません。そして茶と煎餅ができましたが、看護婦さんは恐くて食べない。口頭結核は咳をする度にばい菌が出る、危険なんです。けれどもちつとも恐ろしくない。なぜなら精神的に力を戴いている。平気で煎餅、お茶をいただきました。咳をすればすぐ飛んでくるところにいて、しかし、平気なんです。イエス様のことを思うと何でもありません。結核は食べ物からも感染するのですが、イエス様のことを思うと平気なのであります。病人を嫌わず、病人や家族に近づかねばならない、救いを伝えねばならない、責任を覚えるのであります。そしてこのようなキリスト伝道が役立つ。昔はそのようなハンセン病の人、結核の人、貧乏な人が多く、貧乏人ほどそういう病気で、家族も気の毒であり、悲惨でありました。そういう人々にこそ、伝道すべきではないでしょうか。



韓国には、今世界一という大きな教会があります。この前、ソウルに在る教会が米国のプリンストン大学神学部出身、その方の名はその人の名誉のために言いませんが、その方の勧めで、ソウルの中流階級に伝道されるのがいいと言われたことがキリスト新聞に出ていました。私も一回ある長老派の小さい教会の牧師さんの案内でその大教会に行きました。その

時は七千五百人、二つの会堂で話をされていきました。しかも一回にできませんので、八時半か九時頃から一時間半くらいの礼拝と午後の一時からの礼拝とありました。中流階級に伝道なさるから、大学の先生もいるし、高等学校、中、小学校の先生達、また高等学校や大学の学生達もいました。中流階級の経済的にも安定した人々に伝道すると効果は上げやすい。効果という言葉は語弊があるかも知れませんが、それでの教会は会堂を継ぎ足して大きくになりました。

しかし、韓国には、ハンセン病者は日本以上に多い、今日本にはハンセン病は殆ど伝染の心配がない、殆どは健康を回復しております。それから気の毒なのが原爆被爆者なのです。ハンセン病者が嫌われるように、韓国では原爆被爆者が嫌われています。伝染なんかありませんのに嫌われています。ところがそういうような原爆被爆者やハンセン病患者に伝道していませんのであります。私はハンセン病者には韓国のあちこちで会いましたけれども、原爆被爆者には主に釜山で会いました。昨年は大邱でも伝道に導かれました。充分な伝道は時間がなくてできませんでしたが、釜山では今まで六回ぐらい、一年おきか二年おきに行っております。毎年行ったこともありません。本当に悲惨なのです。最近は何ロイドはありませんが、前にはありました。そうして尋ねて行きますというと、日本のように生活保障などありません。日本では原爆手帳をもらって病状によれば広島、長崎の原爆病院に入る。しかし、韓国には全然これはありません。非常に悲惨で生活が出来ない。そんな訳で一人暮らしの方には、去年は二、三人の家族の方にもわずかでもお金を持つて行きました。まえには一人

の方に、食べ物や近所で買って来てもらって、パンとかりんごあるいはみかんとかいったものを持つて行きました。

そして釜山でシキゼツ牧師、皆さんご存じでしょうか。平壤において日本の神社参拝を反対して、牢屋に入れられた、体は弱かったのであります。そして獄死したことで有名です。その牧師の教会が釜山にあります。そこへ今まで四回くらい導かれてお話しさせて頂きました。釜山の支部長と副支部長に会い、そのお二人の案内で、たしか土曜日に被爆患者を訪問しました。その教会の夜の祈禱会だったと思います。二百人くらい会員のいる教会です。教会の牧師さん始め代表的な長老と言われる人々に、

「この釜山にも非常に気の毒な人々がいるから、まず伝道してあげて下さい。この教会に裕福な方が大勢いらつしやるよ。だから、どうぞ愛の実行をしてあげて下さい。」

と頼んだのであります。ところがその翌年行った時に聞きましたら、全然しておいでにならない。非常に韓国教会のために悲しみました。

これは例として話したことで、つい話してしまいました。牧師もクリスチャンで、聖書学者もクリスチャンであります。クリスチャンでない聖書学者や神学者は本当の良い伝道はできません。本当のクリスチャンでなければ聖書学者でも神学者でもあり得ないと言わねばならないと思います。そういう意味において、まず第一に韓国の気の毒な人々に伝道とともに愛の実行をすべきであります。我等の救い主、イエス・キリストを思うならば、本当にこのような気の毒な人々に愛の手をのびすべきではないでしょうか。原爆被爆者、ハンセン病者でなくてもほかの気の毒な人々も、ここにあげてありますよう

な、本当の意味の貧しい人々、あるいは非常に悲しんでいる人、人に嫌われる人、冷遇される、迫害される、良いことをしているのに迫害される、そういう人々、そういう人こそ幸せであるとイエス様はおっしゃっているのであります。



山上の垂訓をよく味わいますと、イエス・キリスト自身は実はこちらにあげてあるような方であったということを感じるのであります。イエス様こそ本場にまず第一に貧しかった。イエス様の貧しかったことを皆様ご存じでしょうか。例えばマタイ福音書第二十一章でエルサレムに入られる時に非常に腹が減っておられた。そして遠方にいちじくの木があったので、成り遅れの実があるような気がされた。そこへ行つて見られたら、実が無くて葉ばかりであった。その時はイエス様は朝飯を食べておられなかつたのであります。非常に貧乏でした。いわゆるナザレの人間的な郷里においてもそうでありました。戸籍上の父親のヨセフは早く死んだと言われています。弟、妹が四、五人あったと言われています。聖書からも分りますようにヤコブ、ヨハネという弟がおります。イエス様の私生涯はナザレで三十年過ごされています。そしてたぶんヨセフは大工をしておったから、大工によつて家計をたてて、お母さんに孝養を尽くし、弟妹の養教育を手伝われたことと思えます。そのように生い立ちからイエス様は貧乏であつたのです。そうして公生涯になつても、お金があつてあつたこつち回るといふことではなく、いわゆる献金をする人もあ

りましたが、献金がないこともあり、一食も二食も一日も食はずに過ごされることがあつたと思えます。

ヨハネ福音書の第四章にスカルの井戸のことがあります。弟子達がパンを買つてきた。イエス様は靈的に生きておられたので、「わたしにはあなた達の知らない食べ物がある、天の父の御旨を行うことが、わたしの食べ物である」とおっしゃつた。腹が減っているのに勝つ信仰または魂、精神力というか、そういうものをもつておいでになつた。そして約三年間の公生涯において着ておられる着物も揆だらけ、汚れているにちがひなかつた。女性の信者が着物を捧げたり、洗濯してあげたりしたでしょう。けれども壊だらけのこともあつたにちがひない。ご自分のそういう貧しい生活の中において、実は本当の深い意味を知られた、発見された、あるいは靈感を受けられた。いろいろ深く信仰的、靈的にお考えになつて、本当はこれこそ真の幸いであるということを発見された。ご自分の体験から出ているということが言えるのであります。そしてイエス様くらい悲しまれた方はありません。たとえば「わが主よ、なぜわたしを捨て給うか」とあるように、十字架においても天の父に捨てられた。ゲッセマネの園において流し給うた汗は血のようであつた。イエス様のように、血のしずくのような汗を流して祈られた方が世界に一人としてごぞいましょうか。このようにイエス様御自身が非常に貧しく、また悲しまれたのであります。



時間が経ちましたが、もう一度四節を学びます。この四節もさつき申しましたような文章構造であります。「マカリオイホイペンスーンテス ホテイアウトイ パラクレイセイソクタイ」。パラクレイセイソクタイと言うのは、悲しむ者こそ慰められる、励まされる、必ずそのようになるから幸せだ、ということです。人間にはいろいろ悲しいことがある。さつき申しましたようにハンセン病、原爆被爆、その他現在の治らない病気など、また人から嫌がられる病気もあります。植物人間もそうです、本人も家族も非常な悲しみをおぼえます。事業の失敗で破産した人、いろいろ複雑に数え切れないほどに人間の悲しみの理由があります。誰か愛する夫とか妻とかあるいは子供に死なれたとか、いわゆる死に別れの悲しみ、生き別れの悲しみもあります。いつさいのこれらの悲しみに対して「あなたたちは幸いだ」と、真に悲しむ者こそ慰められる、励め励まされるようになるとキリストは言われるのであります。

しかし、「悲しむべき悲しみを悲しむ」ことが必要なのであります。多くの人々は普通の境遇上のことで悲しみますけれども、イエス様がおっしゃる悲しみは、悲しむべき悲しみを悲しまねばならない、という意味を含んでいるのであります。境遇やいろいろな家庭や親族のこと、あるいは友達のこと、悲しむこと以外に、悲しむべき悲しみとはどういうことでしょうか、例えば、政治の腐敗であるとか、五億円も収賄したと言えような人物が大手をふって裁判所に入入りしている。一回国会で国民の皆さんに相すみませんと言った者が肩で風を切っている。そして反証的な裁判を行う。弁護団の中には元裁判長だった者がいる。大金を使って暴力団の有力な

のを抱えている。正に「正義の声地に落ちた」。この正義の声地に落ちたることこそ悲しまねばなりません。政界の腐敗、教会の腐敗、国民道徳の腐敗、こういうことこそ本当に憤慨をもって悲しまねばなりません。憂国の極みであります。クリスチャンとしてキリスト教界における良くないことならば、自分の身に悲しくなるようなことでなくても、公の問題として悲しまねばならないのでしょうか。特に教会に所属している方、あるいは無教会でも自分の関連する集會に何か良くないことがあれば、自分の身の境遇のことは第二として、そういうことを悲しむべきではないでしょうか。そのような意味において悲しみはいくらでもあるのです。そのよ

うな意味の公的な悲しみ、一身上、境遇上の悲しみではなく、公的な悲しみは無限の大ききです。天の父の御旨が十分に行われぬ。世界中の人々が天の父の御旨を汚すようなことを平気でやっている。神の御旨に背くことをどんどんやっている。そういうことがイエス様の非常に深い悲しみであつたのです。その故にさつき申しましたように十字架におつきになつた。そうして十字架において「エリ エリ レマ サバクタニ」、我が神、我が神、何故我を捨て給うか。天の父に捨てられるような悲しみにあわれた。十字架の死のお苦しみは、私たちが想像もできない苦しみであり、悲しみなのであります。体験は勿論のこと、想像することさえできないのですよ、イエス様の十字架上の苦しみと悲しみは。

しかし、イエス様は復活なさつた。そうして天国において神の子としての栄光をお持ちになつておられる、誉れをお持ちになつた。地上においてはユダヤ人の大部分は軽蔑した。パリサイ人や長老、神殿の祭司階級が非常に軽蔑した。その

軽蔑あるいは憎しみから十字架におつきになられた。しかし、その地位が転倒する天国では、天の位、無限の高さの位です。最後の裁きにおいては、どんなにこの地上で偉い者でも土下座するようにしてイエス様を拝まねばならない。イエス・キリストを信じないでおつて、どんなに許して下さいといつても許されない。そして最後の大裁判によつて非常な苦しみである地獄に落ちねばならない。そしてイエス様は神の御一人子としての栄光の位におつきになつて、自由自在に天国をお治めになる。そのことがイエス様には歴然として分つておいでになつたのであります。だからさつき言いましたように、真に悲しむ者はイエス様であり、そして御自分は本当に幸せになられた。そういう意識において山上の垂訓を話された。イエス様のように信仰に生きて、イエス・キリストのように愛の実行をしていくときに我等は悲しむのです。憂国の氣を持つ者に悲しみがある。しかし、そういう憂いを持つ者が本当の慰めを与えられる。キリストの御言葉によつて慰められる。地上においても慰められる。そして天国に行けば一層に深く強く大きく、慰め、励まされるのであります。三節にありますように天国が本当に自分のものとなつてくるのであります。



次に、五節に移りまして、「柔和なるものは、幸いである、なぜならば、地を継ぐからである」と、柔和ということはおとなしいこと。私たちは人からちよつと悪く言われても腹をたててしまふけれども、おとなしい人はじつと我慢してい

る。そういう人は損をします。言うべきことをよく言えない、自分は正しいのに悪口を言われる、あるいは事業しても競争に追いつ越されてしまう。イエス様はそういう人こそ幸せであるとおつしやつている。その理由は、彼らこそ本当に地を継ぐ。地を継ぐというのは土地をたくさん持つ、嗣業という意味であります。例えばユダヤ人は一時期奴隷として非常に難儀をしました。しかし、パレスチナにおける乳と水の流れる農作物のよく出来る地、カナンでの嗣業を与えられました。損をしたようであつても、けつして損が損にならない、神様が守つて下さる。商売でも損を覚悟の商売をする。

昨日、野池先生に連れられて、昼食を駅前十字屋で食べました。十字屋のやり方は米国のJ・C・ペニーのやり方を習つている。すなわち良い品物を安く売つてサービス良くしている。こうしてJ・C・ペニーは成功した。世界の商店王と言われた。マタイ福音書七章十二節をJ・C・ペニーの父はペニーの小さい時から教えていたと言われています。J・C・ペニーはこれを実行したのであります。

ここは最も靈的な深い意味がありまして、おとなしい人はこの世では損をするのでありますけれども、一生涯損をしても、一生涯貧乏であつてもいいのです。信仰によつてなら神様は慰め励まして下さるのです。地を継ぐといつても天国において地を継ぐ。地上ではどんなに貧乏であつても、天の地を継げば、天国には数え切れないほどの仕事がある。私の小さい雑誌の「求道」に今月書きましたが、タラントの譬話で、わずかのものに忠実によく働いたから、一層大きいことを委ねられた。任命された。すなわち地上において神様からさずかった使命たる仕事を忠実にする。一生懸命まじめにする。

良心的にする。例え成績は劣つておつても忠実に真面目にする如何によつて、神様に「あーよくやった」と褒めて頂く。そしてたくさんのお光あふれる仕事をさせて頂く。それに任命される。天国では数え切れないほどの大事業があるのであります。天国がどれほど大きいか、無限に大きいのであります。例えば天国に行つたときには、宇宙の完成という大事業があります。地上の大洪水、弱肉強食が無いようになる自然界の完成、などが無限にあります。地上においてどんなに学問なく、力のないものであつても、自分に託された使命たる仕事を一生懸命真面目にすれば、良心的にすれば、それによつて神様は大きいことをさせて下さるのであります。



三日くらい何も食はず、非常に喉が渴いて、舌が焼けるように苦しい、そういう飢渴の時に水を求める。広島原爆に遭つた方は、体全体が焼けるようで、もがき苦しみ川にとび込んだのであります。わたしたちは体が焼け、三日も水を飲めずにおつて、水がほしいというほどに義を求めるでしょうか。そのような深い意味が六節の「義に飢え渴くものは幸いである」に含まれています。イエス様はそれほどに義に飢え渴き給うたのであります。そのあとの九節「平和ならしむものは幸いである」もみんなそうなのであります。これもですね、本当に平和にするということに決して幸いはないのであります。イエス様こそ真のピースメーカー、すなわちご存じの十字架におつきになった。エペソ書第二章十三節以下にありますように、イエス様が十字架について身代つて死んで下

さつたために、神様の我等人類に対する罪についての怒りがないだめられて、神と人間の平和が始まつたのであります。人間の罪を解決することは、人生問題のすべての解決。普通の場合、誰も死ぬことは嫌です。イエス様の信仰に生きて天国がはつきり分かるようになる。本当に御国が慕わしくなる。天国行きが楽しみになる。どんなにこの世的に恵まれていても、人生問題の本当の解決は、天国の希望がないときません。世界一の大金持ちであろうと、世界一の学者であろうと、非常な地位、権利ある身分になろうと、どんなに大事業に成功しようも、皆一度は死なねばなりません。死んでしまえば百万長者もこの世に財産を残しておいてあの世に行かねばなりません。イエス様の救いを受けない者は皆地獄の亡びであります。仏教なんかによつてでは救いはありません。仏教であろうと、どんな宗教でも、日本にたくさん在る神社というものにも絶対に救いはありません。イエス・キリストの信仰によつてこそ、神の国、天国、永遠の命の救いがあるのです。天国の救いに入ることは一番の幸せ。我等が天国の救いに入る、永遠の御国の誉れを頂くためにキリストは身代つて十字架に死んだのであります。

けれどもピースメーカーであつたことは、イエス様の非常な苦しみでありました。しかし、それを通してイエス様もまた幸せに入られた。すなわち復活して昇天された。また、いわゆる再臨がありますとイエス・キリストは本当に世界の大王であつて、もし天皇がその時呼び出されたならば、天皇も完全にイエス様の前に頭を下げなければならぬ。あるいは天皇以上に地位、権利があるといわれるようなアメリカの大統領と言えども、イエス様の前には土下座するようにして頭

を下げねばなりません。主の再臨の時、最後の再臨の時はこの世でどんな地位にあつた者も土下座するようにしてイエス様を拜まねばならないのであります。そうして裁きを受けねばならないのであります。世界一平和ならしむるものとしてだれも想像できないほどの苦しみをお受けになつたイエス様こそ、本当に平和ならしむる最高の唯一の尊いお方であります。そうしてそれだけにまた幸せにおなりになつたのであります。

次に、七節の「哀れみ深い人は幸いである」。同情深い人は、普通に言つて決して幸せではないのであります。けれどもそういう人こそ、神様に慰められ、哀れみを受けるのです。人に哀れみを持たない者は、人からも哀れまれません。利己主義で、人の悪口を言つたり、悪いことばかりする者は、決して人から同情されることはありません。イエス様は哀れみの心を持つて気の毒な人に愛の実行をする、同情して人のために尽くす者に同情を注いで下さる。神様、キリストから哀れまれて、同情されて、慰め励まして頂くに勝る幸せはないのであります。

その次は、八節の「心の清い人は幸いである」。この清いというのには「カサロス」、心は「カルデア」、心情を意味する言葉です。ルターが言っていますが、ここは解釈の難しいところですよ。まず第一に本当に心の清い人がいるか。一点の非のうちどころが無いほどに汚らわしいことが何もない清い人がいるか。まず清い心を持つことができない。

それから「神を見る」、世の中に生まれながらに神を見ることのできる人がいるか、実際ないのであります。聖書を旧約からずつと読みますと、殊に山上の垂訓を学びますと、心が

清められるのであります。そうしてイエス様の十字架を仰ぐようになる。罪が分らねば神は分らない、罪が分つて神様の清さ、恐ろしさが分つてくる。ほかの宗教ではそういうことはありません。親驚の説いている罪も聖書に比べれば浅いのです。聖書を読んで神様が分ることによつて、罪が分るともに心が清められていく、そうして神様が分つていく。肉眼で見ることができなくても分つてくる。その分ることを靈的には神を見るというのであります。そうしてまたイエス・キリストの再臨があつて神の国に入らせて頂いた時に、はつきりと肉眼であざやかに、パウロがコリント前書第十三章に「今地上においては見るところはおぼろである。かの日にはあらわに見ることができると記すように、はつきりと神様を見ることができるとです。これに勝る幸せはありません。



次に「平和ならしむる者は幸いである」について今一度。平和ならしむる者は決して幸せではありません。二十年くらい前でしたが、夜、帰り道、市内で酒飲みが喧嘩をしておつた。喧嘩を止めるため、仲裁しようとしたことがありまして。そしたら、「なにを生意気な」と言つてばあーんと殴られてしまつた。仲裁すなわち平和を作ろうとすると損をすることがあります。けれども本当に平和のために尽くすことは神様の祝福を受けることです。クリスチャンとして一心に祈る、自分のこと、一身上のことは第二、第三として、世界平和の大問題のために祈る。

今は非常に恐ろしい、戦争必至と言わねばならない時代になつております。北海道が占領される、五十メガトンという恐ろしい水素爆弾が東京に落とされる可能性もあります。必ず落とされるとは言いませんが、可能性はあります。また、ICBM、大陸間弾道弾、電波で操縦して百発百中、落とされると日本の半分以上がだめになると言われています。それが飛んで来ないという保証はないのです。さらに恐ろしいのは中性子爆弾、アメリカ大統領レーガンはその製造を命じ、それを同盟の国々に配置しているとされています。真剣に平和を考へねばなりません。

最後に「義のために迫害される人は幸いである」。迫害を受けることは辛いことです。エレミヤを始め、エリヤ、そのほかにもたくさんいます。けれどもそういう者こそ、天国は確実なのであります。こうした恐るべき時代において、信仰によつて我等だけが天国に行くのではなく、日本の民族同胞こぞつて天国の救いにあずかるように祈り、そして平信徒であつても伝道していかねばならないのではないのでしょうか。お祈りをさせていただきます。



天の御父様、この月最後の聖日に、この良き集会を与えられて感謝致します。僕の失敗で下手な長談義になりましたが、お許し下さいますよう。また皆様にもお許し頂けますようお願い致します。

かかる立場に置かれた僕自身が非常に教えられ、また深められ、慰められ、励まされ、また強められて感謝致します。

どうかこの学びのように実行して天の御国に行き、天国に必ず確実に合流し、また我々だけでなく、日本人同胞皆、世界全人類がこぞつて天国の救いにあずかり、早く地上にあなたの御国が来たらんことをお祈り致します。

この会にお集め下さった年老いていらしつやる方、おさな子の方達に豊かに報い、祝福をお願い致します。御旨にかなわば、またお目にかかることが出来ますように。かなわねば、主の再臨の時にお目にかかれますようお願い致します。尊き御名をとおしてこの拙き感謝、賛美、願いをお聞き上げ下さいますようお願い致します。

アーメン